つけて踊ったことがありました。踊っている時は、無我夢中だったのでどんなふうに踊ったのかも覚えていないほどでした。でも、衣しょうをつけたあの日のことはしっかり覚えています。おじいさんたちが六年かかってやっとつけることができた獅子頭を半年の私たちがつけられたのですから。獅子頭をのせられた時、獅子頭にこめられたおじいさんたちの思いと責任とかが重さになってのしかかり、「やらなくては」という気持ちにさせられました。

舞台を終えた私たちに、さらに大きな拍手で迎えてくれた人たちがいました。私たちを指導してくれたおじいさんたちでした。

「ほんとうにすばらしかったよ。ほんとうに。」

と、言っているおじいさんたちの目に涙が光っていました。

彼岸獅子を体験し伝統を守り続けるすばらしさを感じ取ることができました。上手に踊れたうれしさや彼岸獅子を支える人たちの思いを後はいにも伝えていきたいと思います。

いつしか、みなさんの前で川小子ども彼岸獅子をお見せすることを約束します。

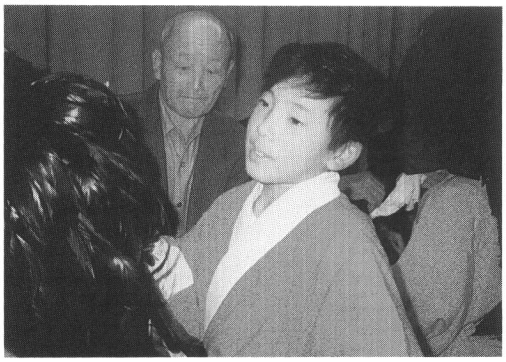
小松彼岸獅子

五年　成田　隆佑

パチパチパチ…と拍手が鳴り、舞台のまくがおりてきました。ぼくは重い獅子がしらをつけ、最後のポーズをきめて、まくが下までおりるのをずっと待っていました。がんばって練習してきた獅子おどりが終わったのです。

五年生になった四月、クラブを決めることになったとき、ぼくは郷土芸能クラブに興味を持ちました。そのクラブは、小松に伝わる彼岸獅子をおどるクラブだったからです。

小さいころから、ぼくは祖父につれられて彼岸獅子を見に行きました。



そこには、おそろしい獅子のお面をかぶっておどる、三人の大人の人がいました。重い獅子がしらをかぶっているのに、おどり方はきびきびしていてすぐそばで演奏されている笛や太鼓とともにとても印象に残っています。そして、できれば、一度おどってみたいと思っていました。

そのあこがれのおどりを、もうすぐおどれるのかと思うと、クラブが始まるのがとても楽しみでした。

いよいよ、最初のクラブの日です。小松に住むおじいちゃんたちが、ぼ